

## 第4節 ムラの空間構成の変容（１） ：高松市川島校区を事例に

内田 忠賢

### 1 問題の所在

地域社会は多種多様な地縁的組織で構成されている。まして村落社会（ムラ）であれば、それらの組織が比較的強固に機能し、あるいは残存していることは言うまでもない。それら地縁的組織が空間レベルに反映した結果のひとつが、一定の範囲を指す呼称（地名）である。また地域社会の構成員が土地を分節的に認識した結果も、同様に一定の範囲を示す呼称（地名）として現れてくる。そしてムラの場合、土地との密着度が高いので、なおさらである。つまり、このようにムラでの地縁的組織や空間認識の様子は、地名とそれが指示する範囲やその分布に反映している。したがって、その組織や認識のメルクマールにより、何種類もの分布（領域）図を描くことができる。逆に言えば、ムラ空間の特徴の一端が、多種類の分布図（領域図）の重層関係から考察できる可能性がある。そこで本報告では、特定のムラ空間をフィールドに、いくつかのメルクマールによる分布図を作成し、比較・検討することを始めたい。それにより、この地区の村落の特徴を考えてみたい。その際、メルクマールになるべき事象が、どの時期をベースにしているかを考慮することで、複数の分布図を時間軸に沿って並べ、ムラの空間構成の歴史的な変容過程・重層関係をも考えることができるのである。

ところで本報告を含む報告書全体、また調査・研究プロジェクト全体は、高松平野中心部の「弘福寺領讃岐国山田郡田図」比定地区周辺（以下「比定地区」と略）の歴史環境に関する総合調査である<sup>(1)</sup>。一方、本報告が対象とする地区は、「比定地区」以外の場所（その東南隣に位置する）であるので、調査全体と本報告の関係を説明する必要がある。

まず、現在の「比定地区」付近のムラが、高松平野の伝統的なムラの姿をどれほど伝えているのか、あるいは、どれほど変貌したかを知らなければならない。そのためには「比定地区」と比較するフィールドを求めなければならない。「比定地区」では都市化の影響が比較的大きく、景観的な市街地や住民の混住化が著しいからである。そこで、「比定地区」のムラを相対化するため、「比定地区」の近隣で、都市化の影響が比較的少ない地区を調査・研究する必要性が生じる。本報告で「変化」「重層」がキーワードになるのも、そのためである。

次に高松平野の、さらには讃岐のムラ研究に結びつける必要がある。極端に言えば、「比定地区」は、古代以来の先進地域、高松平野のごく一部なのである。運良く、「比定地区」の古地図だけが残ったにすぎない。したがって、視点を高松平野、讃岐平野全体に広げることも必要だろう。このテーマでプロジェクトのメインとなる古代まで直接、時代をつなぐことは困難かもしれない。しかし、少なくとも近世のムラの特徴を把握して、古代のムラ研究に近付けねばならない。

また本報告は、意外に蓄積のない讃岐農村研究の欠を補う、ケーススタディとなることを目標にしている。讃岐の農村研究に関して、民俗事例の収集があるものの、分析的な研究は非常に少ない。管見の限りでは、経済史に関するものが若干あるほかは、空間レベルでの把握を試みた石原潤の論文を挙げるにすぎない<sup>(2)</sup>。石原も指摘するように、近世文書を始めとする残存史料の少なさがネックになっている。むろん高松平野の農村についても同じ状況である。このような場合、現在、入手できる資料を、様々な視点で検討しなければならない。

前述のように、本報告では高松平野の1地区を事例に、時間軸をも射程に入れて、ムラの複数の空間構成を提示し、さらに比較・検討することを目的としている。また、ムラの姿を過去へと遡る作業

の手がかりを得たいと考えている。具体的には、まず4種類の分布（領域）図、すなわち小字、現在の自治会、昭和20年の集落（と小地名）、現在の地神の祭祀単位（メンバ）の各分布図を作成・提示する。次に、それらの資料から近世後期の「免」復原図を作成し、以上5種類の分布図を資料として提示する。そして、それらを時間軸に沿って並べ、比較し、分布（領域）の特徴を考え、ムラ空間把握の手がかりとしたい。

## 2 分布（領域）図の作成（1）

ここでは対象地区の空間領域を示す資料（分布図）を作成・提示する。主な対象は高松市川島校区である。川島校区は、正確には高松市立川島小学校区であり、高松市役所山田支所が直接に管轄する地区となっている。歴史的には大正11（1922）年～昭和28（1953）年の、ほぼ山田郡川島町の範囲である。（それに旧・池田村の一部が加わる）。川島校区をめぐる近世後期以降の行政区分の変遷は表5に示した。藩政村の中心は坂元・高野・上田井の3村である。なお、ベースマップは高松市発行の1/10,000都市計画図（最終的には、その縮小図）である。

表5 対象地区の行政区分変遷

|       | 明治23(1890)   | 大正11(1922) | 昭和28(1953) | 昭和41(1966) |
|-------|--------------|------------|------------|------------|
| (山田郡) | 坂元村 / 坂ノ上村 / | 川島町坂元 /    | 山田町大字坂元 /  | (高松市) 川島東町 |
|       | 高野村 /        | 〃 高野 /     | 〃 高野 /     | 〃 川島町      |
|       | 上田井村 /       | 〃 上田井 /    | 〃 上田井 /    | 〃 由良町      |
|       | 池田村 /        | 池田村 /      | 西植田村の一部 /  | 山田町の一部 /   |
|       |              |            |            | 〃 池田町      |

### a 小字の分布（第29図）

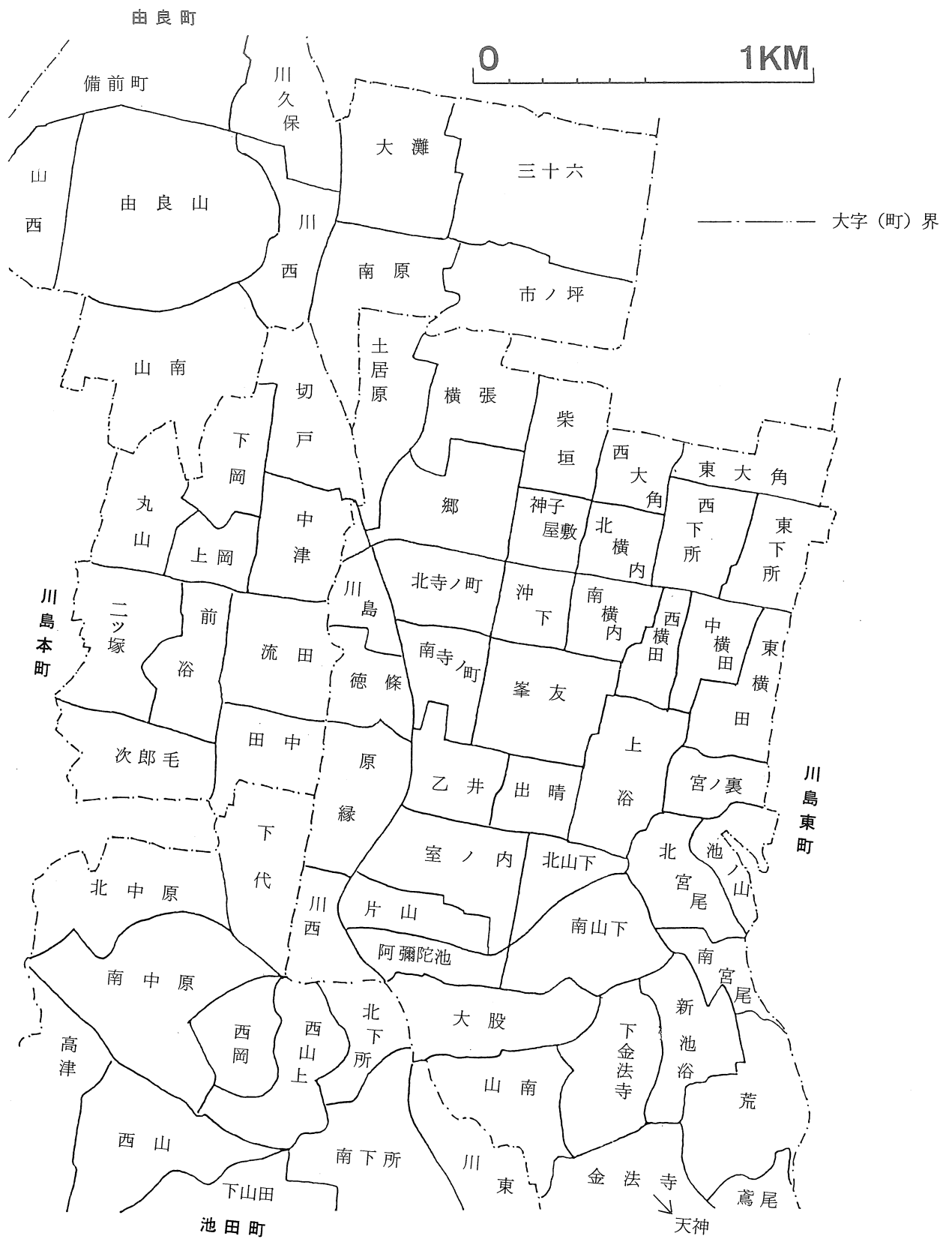
地名の比定などには、近世から現代まで続いた小字名とその分布がもっとも役に立つ。ここでは高松市作成の最新の『小字分布図』（平成元年）を、川島校区についてのみ再トレースした。この地図の小字名は、結果的であるが近世後期の『東讃郡村免名録』（以下、『免名録』と略す）記載の地名と重複するケースが多い。一般的な小字の成立過程から判断して、少なくとも近代までには定着したものと、大まかに考えられる。ちなみに讃岐の藩政村が大規模であるのは有名だが（全国的には大字＝藩政村が一般的）、讃岐の小字も他地方の「大字」から「字」程度の広い範囲に対応している。

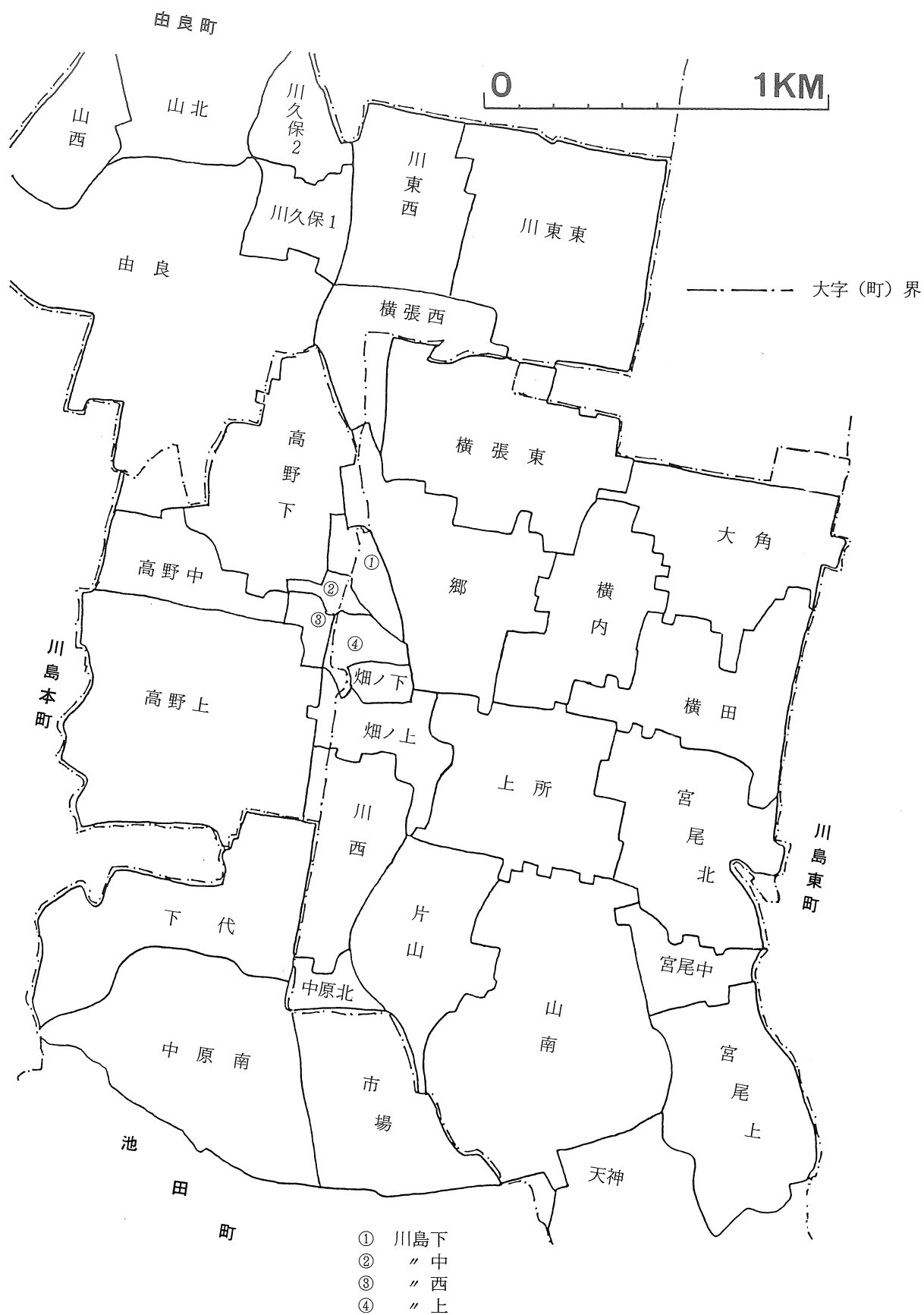
### b 自治会の分布図（第30図）

高松市役所山田支所が把握する自治会資料より作成した。資料の時期は平成2（1990）年ころの状況である。なお原資料には、新興の団地単位の自治会も記入されていたが、それは本報告の主旨から除外してある。また自治会の性格は、地縁組織であるが、基本的に戸の集合（属人・属戸）である。自治会の範囲は土地の区分（属地）ではないので、各自治会の境界は正確に線引きできない。したがって各自治会の範囲は、必ずしも隣接する必要がないが、第30図では便宜上、隣接するように線引きした。

### c 昭和20年の集落分布（第31-2図）

東原岩男（監修）『川島郷土誌』記載の「昭和20年ごろの川島校区の散村・街村」（図26-1）および「終戦当時の集落名・小字名・戸数」（表6）を参考に、小字名（第29図）などと対照しながら、





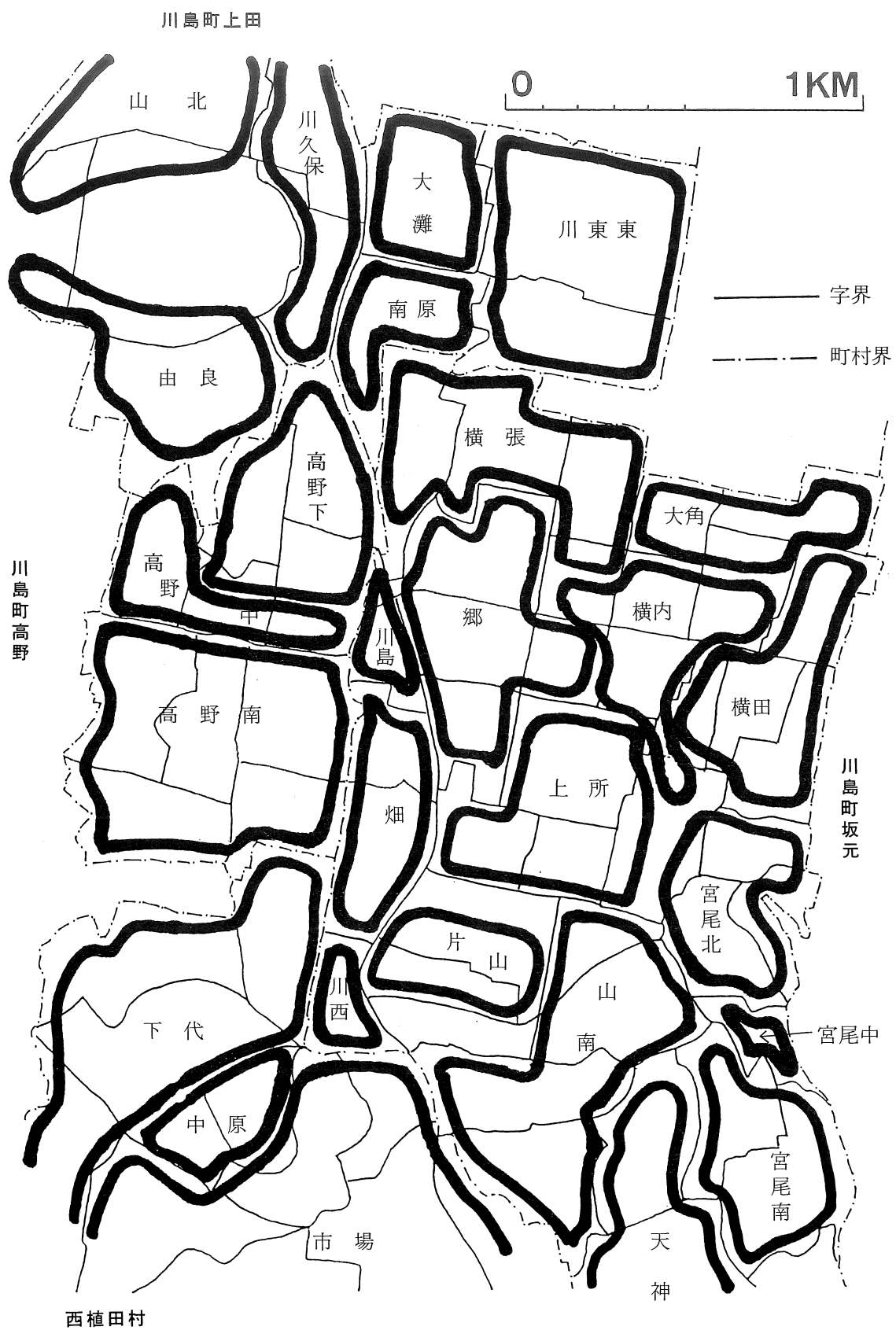
第30図 自治会の分布図



| 町元<br>東 坂 島 川<br>(旧) |                |                            |                  |                  |                     |               |            |                 |        |               |            |           |       | 現町名       |       |
|----------------------|----------------|----------------------------|------------------|------------------|---------------------|---------------|------------|-----------------|--------|---------------|------------|-----------|-------|-----------|-------|
| 横張                   | 郷              | 横内                         | 横田               | 大角               | 宮尾北                 | 宮尾中           | 宮尾南        | 上所              | 天神     | 山南            | 片山         | 川島        | 畑     | 川西        | 集落名   |
| 横張・土居原・柴垣・神子屋敷(一部)   | 郷・南房ノ町・北房ノ町・沖下 | 北横内・南横内・神子屋敷・上浴(一部)・横張(一部) | 西横田・中横田・東横田・東下所  | 西大角・東大角・西下所(一部)  | 北宮尾・宮ノ裏・池ノ山・上浴(一部)  | 南宮尾           | 荒・新池浴      | 乙井・峯友・出晴・上浴(一部) | 金法寺・天神 | 南山下・北山下・大股・山南 | 片山・室ノ内(一部) | 川島・中津(一部) | 徳条・原縁 | 川西・田中(一部) | 小 字 名 |
| 三四                   | 二四             | 二四                         | 二三               | 二三               | 一四                  | 一六            | 一五         | 三三              | 一二     | 三〇            | 一九         | 一二        | 一四    | 一三        | 戸数 農家 |
| 町元<br>良 田 井<br>(旧 上) |                |                            |                  |                  |                     |               |            |                 |        |               |            |           |       | 現町名       |       |
| 池田町<br>(旧池田)         |                |                            | 川島本町<br>(旧高野)    |                  |                     | 由良町<br>(旧上田井) |            |                 |        |               |            |           |       | 集落名       |       |
| 下代                   | 中原             | 市場                         | 高野南              | 高野中              | 高野下                 | 由良            | 山北         | 川久保             | 大灘     | 南原            | 川東東        | 小 字 名     |       |           | 戸数 農家 |
| 北中原・南中原(一部)・高津・下代    | 西岡(一部)・南中原(一部) | 西山・上・西岡(一部)・西山・北上所(一部)     | 二ツ塚・前浴・次郎毛・流田・田中 | 丸山・上岡(一部)・中津(一部) | 切戸・下岡・上岡(一部)・中津(一部) | 山南・山西(一部)     | 備前町・山西(一部) | 川久保・川西          | 大灘     | 南原            | 三十六・市ノ坪    | 小 字 名     |       |           | 戸数 農家 |
| 二八                   | 五五             | 三三                         | 二二               | 三一               | 二五                  | 四〇            | 四〇         | 一五              | 八      | 二四            | 二四         | 小 字 名     |       |           | 戸数 農家 |

表6 終戦当時の集落名・小字名・戸数

(『川島郷土誌』545頁)



第31-2図 昭和20年頃の集落

昭和20年頃の集落分布図を作成した<sup>(3)</sup>。(現在の小字と終戦当時の小字を区別するため、後者を“小字”と表現する)。当時の集落名・“小字名”はほぼ現在の小字名・地神の祭祠単位名・自治会名に残っている。また、この時期の集落の分布は、大正11(1922)年の常会(自治会の前身)の分布と、地名に限れば、ほぼ同じである<sup>(4)</sup>。ちなみに坂元の郷集落の“小字”、南・北「寿の町(じゅのまち)」は、現在の小字の南・北「寺の町(じのまち)」に対応する。

#### d メンバ(地神祭の組織)の分布図(第32図)

メンバ(免場)は、地元で部落・集落とも呼ばれる地域社会の単位(地縁的な社会集団)である。その機能も現在では、地区の氏神・神社の祭祠関係のまとまり程度になっているが、かつては村落結合の大部分が、この社会集団に負っていたと言われる。葬式組(同行)も小規模のメンバではメンバ=同行であり、大規模なメンバではメンバを分割した単位が同行であった。本報告では近世後期の免や過去の免場と区別するため、現在の社会集団についてメンバと表現する。地神及び地神祭についての説明は、註ならびに参考文献にゆずり、本文では省略する<sup>(5)</sup>。

さてメンバの分布図作成に際しては、松宇神社の宮司さんから聞き取った内容をもとにした。この宮司さんは、川島校区の大部分の地神祭(社日さん)に、祭司(オタイさん)として参加する。各メンバは、地神祭をはじめとする松宇神社の氏子圏なのである。メンバの画定に際しては、各メンバでの聞き取りで一部、再確認した。

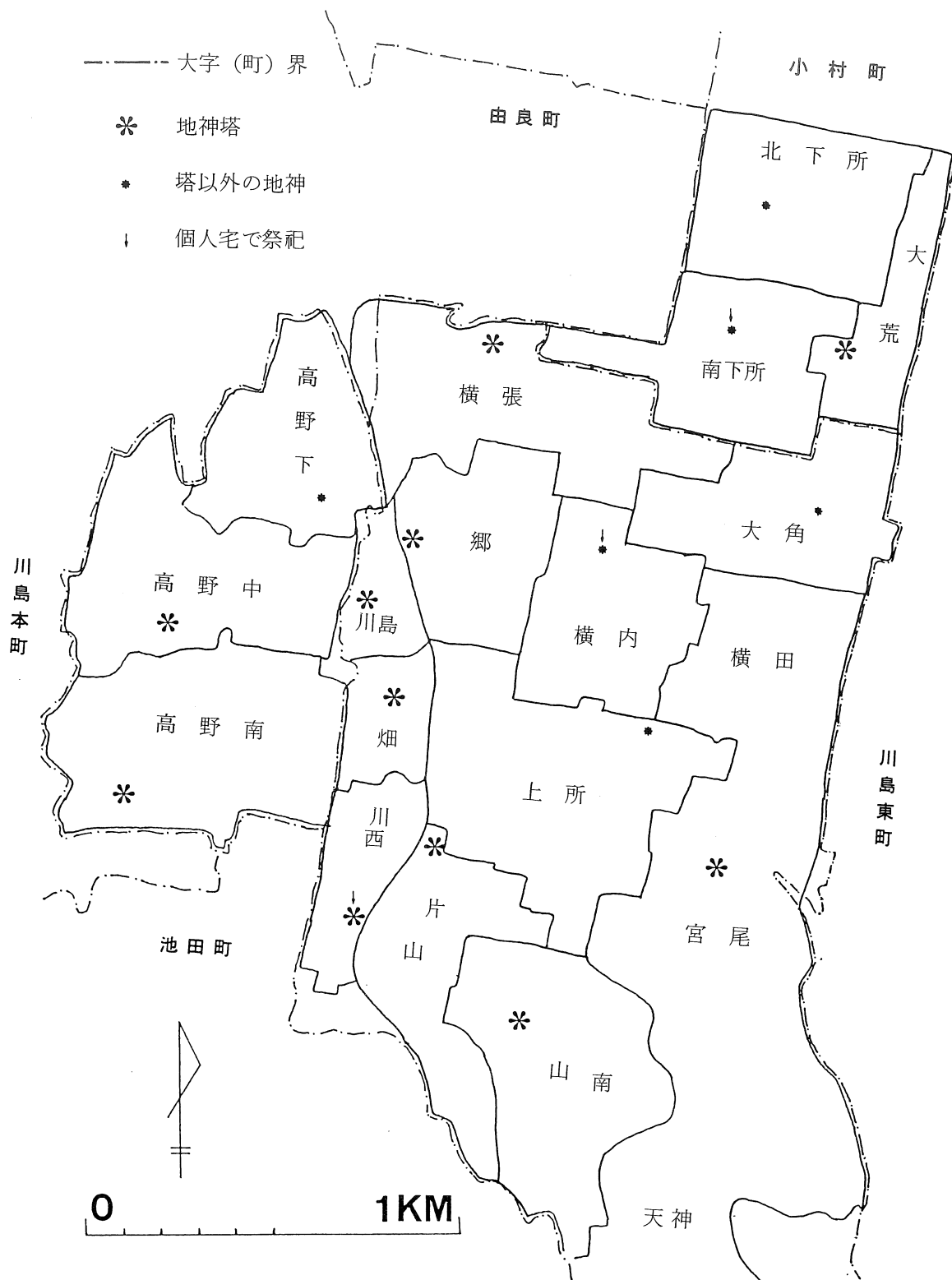
ここで第30図について2点確認したい。まず、メンバの線引きは大まかにならざるを得ないことである。なぜなら、メンバの結合契機は地縁であるものの、自治会と同じく戸の集合である。そして、さらに現在では新住民の多くがメンバに加入せず、大まかなメンバの範囲内にも、メンバの構成員以外の住民が存在するからである。しかし第30図では、聞き取り内容に従い、メンバの境界は隣接するように表現した。次に、川島校区のメンバ全部を対象にしないことである。先に「川島校区の大部分」と表現したのは、そのためである。あくまでも松宇神社の宮司がカバーする範囲、いわゆる氏子圏に限定する。ここの氏子圏は、北東は川島校区以外の小村町(旧・小村)の一部まで含む。一方、校区内の、北西の由良町(旧・上田井村)のほぼ全域と南西の池田町(旧・池田村)の一部は氏子圏ではない。現宮司さんのお話によれば、この氏子圏は、少なくとも1世代前(彼の父親)が現役のころから変化はない。

### 3 分布(領域)図の作成(2):近世後期の免の復原

次に、讃岐の村落の空間領域を考える際に、かつての免の復原を行う必要がある。免は近世期の貢租の単位地区であるといわれる。そして免の範囲の中心となった社会集団(集落あるいは戸の集合)が免場であると考えられている。つまり免と免場はある程度、対応関係にあると思われる<sup>(6)</sup>。そして近世後期の免場は、現在の村落のベースになったというのが定説である。したがって、この時期の免を復原する必要がある。旧・高松藩領の、この地区の近世後期の免場を考える場合、基本史料はやはり『免名録』である。

山田郡の坂元・高野・上田井の3村に関し『免名録』には次のように記されている。

|     |     |    |     |           |
|-----|-----|----|-----|-----------|
| 坂元村 | 上所免 | 片山 | 上さこ | 出晴        |
|     | 宮西免 | 池内 |     |           |
|     | 山南免 | 打越 | 坂瀬  | 天神 東原 鳶ヶ尾 |
|     | 池下免 | 横田 |     |           |



第32図 メンバの分布

|      |      |     |          |
|------|------|-----|----------|
|      | 沖上免  | 横張  | 柴垣       |
|      | 郷村免  | 宗友  |          |
|      | 郷免   | 横手  |          |
|      | 水入免  | 川島  | 徳条 川西    |
|      | 下所免  | 大角  |          |
| 高野村  | 岡田免  | 善光寺 | 九ノ宮 岡 赤池 |
|      | 上所免  | 前さこ | 早神       |
|      | 中所免  | 流田  |          |
|      | 下所免  | 切戸  | 溝川       |
| 上田井村 | 中所免  | 舛形  | 南原       |
|      | 下所免  | 大灘  | 三十六 由良   |
|      | 川西免  | 川窪  |          |
|      | 備前町免 | 備前町 | 鎌倉 禅門    |
|      | 山南免  | 切戸  | 池内 室田    |

『免名録』の記載形式の点で、山田郡は西の香川郡と違い、免名の後にその免の範囲に含まれる小地名を記している。したがって免の復原には、免名だけでなく小地名も復原の手がかりになる。川島校区の範囲の免も、これらと、前章で提示した4分布図、特に小字名の分布図との対照作業を行う。後でも述べるが、小地名に関しては、現在の自治会名、現在のメンバ名は必ずしも参考にならない場合がある。また昭和20年の集落名・“小字”名資料は、集落の位置関係や地名を確認する際、参考になる。以下、旧村別に復原の作業プロセスを示していく。

#### a 坂元村

上所免では小字名として「上所」がないが、3小地名がそのまま小字「片山」「上浴（かみさこ）」「出晴」として残っている。一方、自治会名・メンバ名では「上所」「片山」が伝えられる。

宮西免・池内は地名として残っていない。

山南免では「山南」が小字名・自治会名・メンバ名として残る。また2小地名が小字「天神」「鳶ヶ尾」（地図の左下、範囲外）に伝わる。

池下免では「池下」という地名は伝えられないものの、小地名「横田」が小字「東横田」「中横田」「西横田」として、また自治会名・メンバ名の「横田」として残る。いずれもほぼ同じ範囲である。

沖上免では「沖上」は伝えられないが、小地名「横張」が小字名・自治会名・メンバ名として伝えられ、小地名「柴垣」は小字名として残る。これらは、ほぼ同じ範囲を示している。

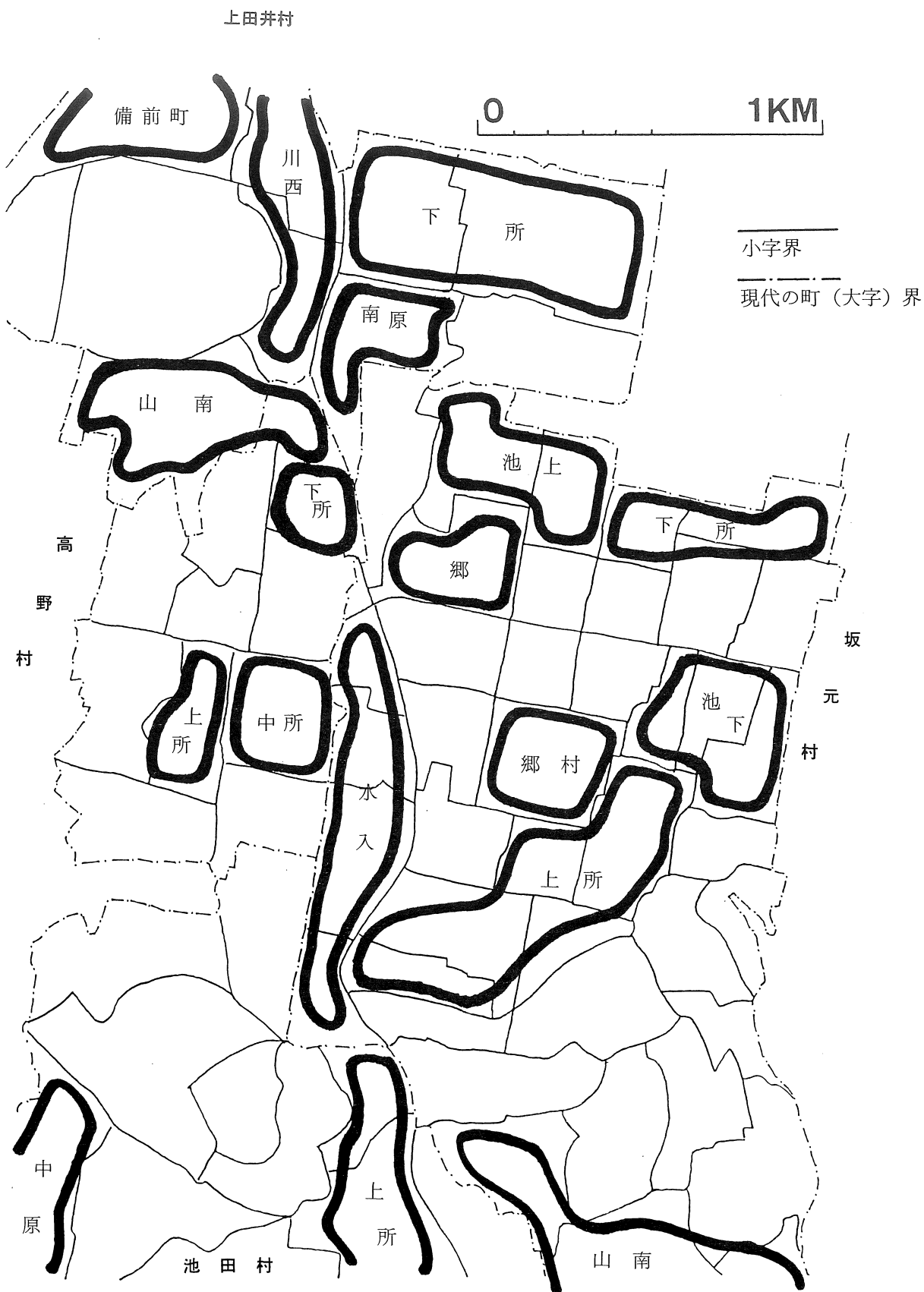
郷村免では小地名「宗友」が小字名「峯友」として伝えられる。一方、免名「郷村」に似た地名は残っていない（「郷」とは、とりあえず別と考える）。

郷免では「郷」が小字名・自治会名・メンバ名に残り、それらの範囲は多少のズレがあるものの、ほぼ同定できよう。なお小地名「横手」は伝わらない。

水入免では「水入」が残らないが、小地名「川島」「川西」が小字名・自治会名・メンバ名に伝えられ、小地名「徳条」も小字「徳條」として残る。

下所免では「下所」が小字「東下所」「西下所」として残る。一方、小地名「大角」が小字「東大角」「西大角」、自治会名・メンバ名「大角」として伝えられる。これらは、ほぼ同じ範囲である。

以上の作業および、昭和20年の集落の位置関係・“小字”を考慮に入れば、坂元村の免場の範囲



第33図 近世後期の免の分布

(近世後期)は第33図(右下)のように復原できる。

b 高野村

岡田免では免名・4小地名ともに伝わらない。

上所免では小地名「前さこ」が小字「前浴」として残る。免名「上所」・小地名「早神」は伝わらない。

中所免では小地名「流田」が小地名として残る。ただし免名は伝わらない。

下所免では小地名「切戸」が小地名として残る。(後述するが、上田井村の小地名「切戸」と隣接すると推定される)。

以上から高野村の免場の範囲(近世後期)は第33図(左中)のように復原できる。だが、この地区では「上所」「中所」「下所」という讃岐の伝統的な地名呼称が、近世に遡る可能性のある小字名に残っていない。自治会名は「高野上」「高野中」「高野下」であり、メンバ名は「高野南」「高野中」「高野下」である。昭和20年の集落名もこのメンバ名と同じである。

c 上田井村

中所免では小地名「南原」のみ小字地名として残る。

下所免では、免名は伝わらないが、小地名「大灘」「三十六」が小字名として残る。ただ小字名「由良」は春日川対岸の小字「由良山」・自治会「由良」と比定した場合、「大灘」「三十六」と「由良」は次に示す川西免を挟んで離れることになる。「由良」は下所免の飛び地と考えても良いが、小地名「由良」の位置については保留としたい。

川西免では免名「川西」が小字名に残り、小地名「川窪」も小字「川久保」として伝えられる。したがって春日川西岸の南北に長い地区と比定される。また昭和20年には“小字”「川久保」「川西」が「川久保」集落を構成していた。

備前町免では、免名・小地名「備前町」が小地名として伝えられ、“小字”名でもある。同じ昭和20年の集落「山北」は、“小字”「備前町」「山西(一部)」で構成されたことも参考になる。他の小地名「鎌倉」「禅門」は残らない。

山南免では免名「山南」と小地名「切戸」が字名で残る。ただし「切戸」は高野村の下所免に含まれる小地名とも共通するが、位置的に隣接するので問題はなかろう。小地名「溝川」は残っていない。

以上から上田井村の免場の範囲(近世後期)は、第33図(左上)のように復原できる。

#### 4 分布(領域)図の比較

作成・提示した5種類の分布図を、近世から現代まで時間軸に沿って並べてみよう。近世の状況を伝えるのが、第33図「近世後期の免」と第29図「小字」である。「小字」のほうは起源としては「免」より古いだろう。条里制を伝える「市ノ坪」がその代表例である。そして「小字」は、明治の地籍図作成に際して、網羅的に記録され現代に伝えられたので、近代以前の産物と考えて良い。ただし、第33図と第29図の前後関係は、判断できない。次に、第32図「メンバ」である。聞き取りの限りでは、現在のメンバは、少なくとも戦前のそれを、踏襲している。そして第31-2図「昭和20年頃の集落」、第30図「現在の自治会」という順になる。これら5図はいずれも住民の空間認識(分節)の反映であるが、地縁的な社会集団に対応した領域という点に限れば、第29図が除外される。これで第33図と第29図の前後関係は問題にならなくなる。残り4図を古い順に並べると、①図28(近世後期)→②図27(近代)→③図26-2(現代初期=昭和20年頃)→④図25(現代)となる。つまり本報告の分布図は、

ページを戻るにつれ近世から現代へと時間を遡るように並べてある。これら4枚の分布図はそれぞれのメルクマールが多少、異質かもしれないが、その時期ごとに、最も重要な地縁的結合を表現するものと考えれば、それらの比較はあながち無意味ではなかろう。ここでは、まず各領域単位の変化に注目してみたい。つまり、ほぼ同じ地点が、どのような地名で呼称され、どれほどの範囲をその領域としているかに着目するのである。さて、4枚の図に示される各領域は、大まかに次の4パターンで変化していることがわかる。

①ほぼ同じ領域を維持している（Aタイプ）

たとえば川島東町の大角地区が典型だろう。第33図（免）の各領域の広がりはやや不正確ではあるものの、近世後期に免として存在した領域は、多くの場合、ほぼ同じような広さで維持されている。大角地区のように同じ呼称（地名）で維持するケース（A1）や、呼称が変わるケース（A2）がある。後者は、川島東町の沖上→横張（東）、池下→横田、由良町の南原→横張西、備前町→山北、などがこれにあたる。いずれにせよAタイプが多いのは事実である。

②ほぼ同じ範囲が細分化し、単位となる領域が狭くなる（Bタイプ）

例えば春日川沿いの小字「川島」から南の地区は、坂元村水入免→川島町川島／畑／川西→川島東町川島下／川島中／川島西／川島上／畑ノ下／畑ノ上／川西、と細分化している。南北の春日川沿いの主要道と、東西の南海道（現・三木国分寺線）の交差するこの付近は近世以来、交通の要である。そのため、川島校区で最も人口が集中する地区となっている。この地区の地縁的な社会集団は、その規模を標準化するために分割されたものと考えられる。由良町の川西（川久保）が川久保1・2の自治会に分離したのも、同様の原則による最新の事例である。

③領域が移動する（Cタイプ）

例外的な現象のように思われる。坂元村上所免は第33図のような東北から南西方向に細長い領域であった。しかし近代になると、上所地区は、かつての郷村免の領域を取り込む。一方、上所免南部の片山地区は領域としては独立した。この結果、上所地区は北へ移動したことになる。この原因は不明である。

④新しい領域が成立するタイプ（Dタイプ）

川島東町の横内地区や南の丘陵部がこれに該当するかもしれない。しかし平野部では数少ないケースと考えられる。なぜなら、地区の平野部は、少なくとも近世前期には開発が終了し、散村形態の集落が成立している。新しい領域が登場する余地は、平野部にはほとんどあるまい。たとえば川島東町の高野中地区は一見、新しく成立した領域に思われる。高野村はかつて「上所・中所・下所」の3免で構成されていた。近代以降も「高野下・高野中・高野南」の3地区で構成される。これらを領域の位置関係で推測すれば、下所免が高野下地区に、中所・上所の2免が合併して高野上地区に成長したと考えられる。したがって高野中地区は近代に新しく成立した可能性はある。しかし、近世後期の岡田免の所在が不明であるので、岡田免が高野中地区になったことも否定できない。いずれにせよ、Dタイプは、平野部では数多くはない。

以上、各領域の変化にはこのA～Dのタイプが考えられるが、平野部ではAタイプが一般的であろう。周知のように、高松平野の開発、集落成立は非常に古く、しかも近世以降は散村の集落形態であった。したがって地縁的な社会集団は、時代をとおして散在居住していたと推測される。この各集団の規模、つまり集落ごとの人口・戸数は変化したにせよ、各集団・集落単位は常に存在・維持されていたと思われる。そのためAタイプが一般的となったのだろう。一例として最近の数字をあげれば、

たとえば川島東町の太田地区は、終戦当時の戸数が22戸で、平成6（1994）年には55戸と倍以上になっているが、自治会の分立は予定されていない。

この4種類の分布図を比較・検討すると、さらにムラの空間構成に関する特徴が分析できるが、今後の課題としておきたい。また、よりミクロなレベルでの検討は、調査を一部行っているものの、次の機会を期したい<sup>(7)</sup>。

（謝辞）本報告に関する調査では、東原茂則さん（松宇神社宮司）、高松市役所山田支所、および川島地区住民の方々にお世話になりました。お礼申し上げます。

#### 註

(1) 第1期の調査報告は、次にまとめられている。

高松市教育委員会編『讃岐国弘福寺領の調査』同、1992年

(2) 石原潤「集落形態と村落共同体：特に讃岐の事例を中心に」人文地理17-1 1965年

(3) 川島郷土誌編集委員会編『川島郷土誌』川島校区地域おこし事業推進委員会 1995年（以下、『郷土誌』と略）。なお、図26-1、表6は544・545頁。

(4) 『郷土誌』280頁

(5) 中原耕夫「讃岐の地神祭」瀬戸内海歴史民俗資料館年報4 1979年また拙稿「太田地区周辺の民俗調査：ムラの伝統的空間構成を中心に」前掲註(1)所収。なお、1995年3月18日に松宇神社の宮司さんが、地神祭で各メンバを回ったコースは、次のとおり。山南→上所→横内→大角→北下所→大荒→横張→郷→高野下→高野中→高野南→畑→川西→片山。このコースは先代の宮司のころも同じだったという。

(6) 石原潤は免場と免は整合しないことを強調するが、説得力に欠けるように思われる。前掲註(2) 52・53頁

(7) 「小字」よりもミクロなレベルの空間認識は、たとえば水田一筆ごとの民俗地名などに現れる。

以前、太田地区周辺で、この問題意識から聞き取り調査をしたときは、水路名に民俗地名が残っていたものの、水田・畑については収集できなかった。今回、川島校区の調査で、たとえば川島東町の免場「片山」において、「ミカンジ」「マエバ」「ウラタンボ」「イッポンマツ」などの民俗地名を収集することができた。